

中部支部

る肺癌とされた。肺癌の中では稀な気管支腺由来の唾液腺癌類似の組織像を呈し、特に気管支内腔を充満するという特異な進展形式を示した興味ある症例であった。光顕及び電顕的検索と若干の文献的考察を加え報告した。

6. 興味ある進展形式を示した扁平上皮癌の一例

社会保険羽津病院内科

真田 修, 東海 浩, 木村光政
島地泰敏, 野北 毅

三重大学第三内科

柏木秀雄, 笠井寛司, 田中 武
同 胸部外科 並河尚二

78才, 男, 15年前より慢性気管支炎として公害認定を受けている。BI700, 57年10月に, 右下葉に肺炎を発症, 抗生物質により軽快後, 肺癌Risk Factorが多いため気管支鏡を施行した。右B8入口部に全周性に気管支をとり囲む白色壊死様物質を認めた。気管支腔の閉塞はなく, 生検では扁平上皮癌であった。手術にてB8入口部に約2cmにわたる扁平上皮癌を認め, 気管支腔に沿って発育浸潤がみられた。リンパ節転移はなかった。

7. 孤立型細気管支肺胞上皮癌の1例

市立静岡病院胸部心臓血管外科

井村正史, 篠崎 拓, 島本光臣
高橋憲太郎, 山崎文郎
河原崎茂孝, 秋山文弥

症例は61才, 男性。咳嗽を主訴として来院し, 初診時左中肺野に3×3cm大の辺縁やや不鮮明の円形陰影を認め, 58年1月左下葉切除術を行った。本例は53年6月大豆大陰影から始まる甚だ緩徐な発育が把握されており, 悪性度の低い孤立型細気管支肺胞上皮癌に属する1例と考えられる。

8. 下葉の無気肺を呈した, 主幹発生 of Adenoid cystic carcinomaの一例

安城更生病院内科

尾崎行男, 伊藤良則, 中西文雄
同 胸部外科

倉田直彦, 新実藤昭
同 病理 平林紀男

Adenoid cystic carcinomaは気管支腺由来の稀な腫瘍である。症例は34歳, 女性, 咳, 発熱が長期間続いた後, 胸痛, 呼吸困難にて来院した。胸部X線写真より, 左肺下葉の無気肺を認めた。気管支鏡所見から左主気管支内に発生した気管支腺腫を認め, 腺様嚢胞癌と診断した。我々は当初, 気管支形成術を施行する予定であったが, 末梢側への浸潤のため, 左肺全摘術を行なわざるを得なかった一例を経験したので報告する。

9. 原発性肺癌を思わせたマイボーム腺腫瘍の肺転移の一例 名古屋大学第1内科

長谷川好規, 岸本広次
河地英昭, 戸谷康信, 森瀬雅典
下方 薫

マイボーム腺腫瘍の頻度は, 全眼瞼腫瘍の1%以下であり稀な疾患である。局所リンパ節, 脳, 肝等への転移の報告はあるが, 肺転移に関する報告は稀である。本症例は, 胸部レ線左肺門部腫瘍を認め, 気管支鏡にて左上幹を閉塞する腫瘍の直接所見を認めた。あたかも原発性肺癌のような所見を呈したが, 生検によりマイボーム腺腫瘍の肺転移であることが判明した。稀有な症例と考え報告した。

10. 気管支鏡で直接所見のみられた転移性肺腫瘍症例について

三重大学胸部外科

並河尚二, 木村 誠, 竹内義広

草川 實

1983年4月末までに手術の行なわれた転移性肺腫瘍51例のうち気管支鏡にて直接腫瘍の可視し得た症例は5例(9.8%)みられた。これら5例はいずれも呼吸器症状を有し, 気管支鏡上4例は管腔を充満する如く末梢よりおし出されて来た如き像が得られ, 1例では胸部レ線上病巣を見出すことが困難な症例で内視鏡上側壁より突出する如く腫瘍が存在していた。いずれも生検によって診断がつけられ4例で切除が, 1例で試験開胸が行なわれた。

11. 両側気管支に同一形態で見られた肺門部扁平上皮癌の1例

国立療養所静澄病院外科

竹内義広, 坂井 隆, 橋詰誉世
望月立夫

三重大学胸部外科

並河尚二, 草川 實

症例は66才の男性。発熱, 咳嗽にて来院。気管支鏡にて, 右中葉気管支入口部に隆起性腫瘍を認め, 生検の結果扁平上皮癌と診断, 低肺機能のため放射線療法を実施。照射終了時, 胸部レ線像上の異常陰影はほぼ消失し, 再度気管支鏡を行ったところ, 右肺の腫瘍はほぼ消失していたが, 左上葉気管支入口部にほぼ同一形態の腫瘍が出現していた。両側の多中心性肺癌と考えられたので報告した。

12. 肺重複癌の1症例

名古屋掖済会病院内科

山本雅史, 山本直彦

同 外科

梶田正文, 大宮 孝, 宮田義彌
同 病理 佐竹立成

名古屋大学第1内科

岸本広次, 河地英昭, 下方 薫
59才男性, 主訴発熱。ほぼ同時期に右S3および左舌区肺炎にて入院。喀痰細胞診にて扁平上皮